

## 刊行のことば

哺乳類に関する研究は、古代ギリシャの哲学者 Aristotlès にさかのぼると言われている。彼の著作『動物誌』には、四肢動物（哺乳類）は胎生で体毛があるとした。クジラ類も胎生で、噴水管があって肺呼吸し、鰓がないことなどが正確に記述されている。彼の言説は近世まで権威をもち続け、やがて哺乳類を研究する学問「哺乳類学」誕生の源流となった。Carl von Linné, Georges-Louis Leclerc Buffon, Jean-Baptiste Lamarck, John Ray たちは哺乳類に関する科学的な記述を残し、それらは博物学の発展と啓蒙思想のうねりをつくり、そして Charles Darwin の進化論へと結実していった。生物は神の創造物ではなく、進化の産物であり、ヒトもまた霊長類の1種で、哺乳類に起源をもつ。こうして哺乳類学は人間を理解する生物学のひとつに据えられるようになった。

しかし、進化論の誕生以前に、私たち人類 *Homo sapiens* が「哺乳類」に属しているとしたのは18世紀中頃のスウェーデンの博物学者 Linné であった。哺乳類 (mammalia) という分類群名は、それまでは Aristotlès を踏襲して「四肢（脚）動物」(quadrupedia) と呼ばれていた。Mammalia は授乳器官である乳房 (mamma) に由来しており、直訳すれば「乳房類」となる。

なぜ Linné はヒトでは成人女性だけに当てはまるこの奇妙な部位名を哺乳類の分類名に採用したのか。そこには Linné の「義憤」が込められていたと伝えられる (Schiebinger 1993)。18世紀中頃までヨーロッパでは、実母に代わって乳児に授乳し養育する「乳母」(ナース) が子どもを産んだ女性たちの「特権的」な職業であった。どこの都市にも乳母の斡旋所があった。貧しい女性は乳母となり、金持ちの女性は乳母を雇い育児を放棄して社交にうつつをぬかした。Linné の造語には、「子どもは母親が自分の母乳で育てるべし」とのメッセージが込められている。

Linné は合計 192 種の哺乳類を記載したが、いまや哺乳類は 6,000 種を超え、現在でも毎年 10 種以上の新種が記載されている。しかし、その身近な哺乳類について私たちはどれだけのことを知り、理解しているだろうか。私たちの身の回りには哺乳類たちが満ちあふれている。コンパニオンアニマルとしてのイヌ *Canis lupus familiaris* やネコ *Felis silvestris catus*, 食料や生活用品を提供しているウシ *Bos taurus* やブタ *Sus scrofa*, ヒツジ *Ovis aries*, あるいはサラブレッドやパンダ *Ailuropoda melanoleuca* が日常会話の話題にのぼる。一方で、ラット *Rattus norvegicus* やマウス *Mus musculus* は医学研究には欠かせない。その理由は多くの病気は哺乳類と共通する人獣共通感染症であるからである。

ところで、現代につながる哺乳類学会は第1次世界大戦終了時に米国で誕生した。「新世界」には、当時、多数の野生動物が息絶して、人々は狩猟によって肉や毛皮を得る一方で、鳥獣による農業被害が多発していた。例えば、捕食者オオカミ *Canis lupus* や穴を掘るプレーリードッグ *Cynomys* spp. は牧畜業の宿敵で、これらの被害に対抗するために哺乳類の研究が進展していった。これを背景に、1919年世界最初の哺乳類学会 (American Society of Mammalogist) が米国農務省経済鳥類学・哺乳類学局 (Department of Agriculture, Division of Economic Ornithology and Mammalogy) の研究者 Clinton H. Merriam や Wilfred H. Osgood らの主導によって誕生した。この動きが刺激となって、ドイツでは1926年に、フランスでは1936年に、それぞれの国の哺乳類学会が誕生している。

では日本はどうか。日本哺乳類学会は2つの前駆組織、戦後に活動を開始した日本哺乳動物学会 (1949年) と哺乳類研究グループ (1960年) が1987年に合流・合併してできた学術組織である。前者の歴史をたどると、1923年に渡瀬庄三郎、黒田長禮、内田清之助、岸田久吉らが設立した「日本哺乳動物学会」にさかのぼることができる (第1章, 第3章参照)。この組織は東京・神田の学士会館で創立大会を開き、その後8回の例会を開いたが、会頭・渡瀬の逝去と後継者不足 (下稲葉・安田 2018) によって、戦争のきな臭さが社会に漂い始める1926年には活動を中断している。その活動は講演や資料・標本を供覧する「勉強会」の域を出なかったが、哺乳類の分布や生物学的特性を総合的に研究しようとする本格的な学術組織を目指していた。ここに私たちの日本哺乳類学会の創基を確認することができる。とすれば日本の哺乳類学会の誕生は1923年ということになる。そ

れは、米国には後塵を拝するもののヨーロッパには先行する、世界で2番目となる哺乳類学会の誕生であった。

今年2023年はその創立100周年に当たる。この書籍はそれを記念して企画されており、その出版までの経緯の記録を以下に示しておく。2012年、日本哺乳類学会の専門委員会のひとつとして「歴史・あゆみ委員会」（以下「歴史委員会」とする）が発足した。その役割は、学会の歴史や活動に関する資料や記録を掘り起こし整理することであった。この活動の過程で、学会の創立年が1923年であり遠くない将来に「百周年」が展望されると認識された。数年後、「歴史委員会」は百周年事業について議論し、そのひとつとして日本での哺乳類学の成り立ちや学会の歴史に関する論文を「哺乳類科学」の別冊記念号として発行することを理事会へ提案した。この提案について審議した理事会は、別冊ではなく「学術書」として出版するのがふさわしいこと、「歴史委員会」がそのたたき台をつくることの2点を再提案した。これは2016年大会で承認された。この案を受け、「歴史委員会」は著作の内容と編集組織について見直し、前者は日本での哺乳類学の発展史や学会の歴史に留まらず、分野別の研究史とその到達点や課題などのレビューを加えて拡充すること、後者は執筆者を念頭に置きつつ多数の中堅・若手会員メンバーを編集者に加えることとした。こうして新たな「編集委員会」が発足し、改めて目次・構成を長い議論をへて確定するとともに、最良・最適な執筆者に原稿を依頼した。

最初の目次案の作成から7年、ようやくここに本書の完成をみた。2部全22章構成の大著となった。感慨無量である。その意味で本書は、日本哺乳類学会の総力を結集した日本哺乳類学百年の学術白書であり、研究的自画像である。日本での哺乳類学の歴史を振り返り、次の百年に向け新たな研究の飛躍と発展を目指す若き哺乳類研究者たちの一里塚になれば幸いである。

ご声援と支援をいただいた日本哺乳類学会の歴代理事長、理事、および会計担当者の皆様に御礼を申し上げます。また出版を引き受けていただいた文永堂出版株式会社と、たえず編集に尽力し、的確で熱いご助言をいただいた松本晶氏に御礼を申し上げます。

2023年9月

『日本の哺乳類学 百年のあゆみ』編集委員会